

ブラジル・ヴィトリアのファイナル 移住人生

ヴィトリア／ツバロン港特
約歯科医 高崎 精介



1968年6月13日に移民船ブラジル丸がサントス港に入港しました。この時、太平洋の船上で20歳を迎えたばかりの単身農業雇用移住青年が波乱万丈の展開のもとにこのエスピリット・サント州ヴィトリアで67歳を迎えるとは想像もつかない事でした。

リオ・デ・ジャネイロの歯科大学を卒業して4歳、3歳と1歳の幼い3人の息子を引き連れて妻と一緒に波乱万丈の人生にピリオドを打つために、このヴィトリアに移転して来たのが1982年10月でした。偶然にも約40年前に愛知県豊橋市にあった外務省管轄の海外移住研修所で約6ヶ月間同じ釜の飯を食い海外移住に燃えていた同期生の熊沢薫君が私達がヴィトリアに引越す1年前に彼も家族共にこのヴィトリアに引っ越ししていました。

知人と云えば、熊沢一家が唯一で私達の新婚旅行で2日間、ヴィトリアを訪れた経験があるだけで私達の家族のルーツがこの風光明媚なヴィトリアでスタートする事に成りました。

ヴィトリア市は世界的にも有名な、しかも、2016年のオリンピック開催地でもあ

るリオ・デ・ジャネイロ市から海岸線を約500km北上した南緯20度19分08秒、西経40度20分16秒に位置するエスピリット・サント州の州都です。人口約35万人ですが隣接の4都市を合わせたヴィトリア大圏は約150万以上の人口に達します。

カンブリ海岸

ここに紹介するカンブリ海岸は数多くあるヴィトリアのビーチの中でも代表する市民の生活と一体化しているビーチで両端をプライア・ド・カント区とツバロン半島に接する全長6kmの海岸です。ツバロン半島には1980年代に建設されたツバロン製鉄所（日本の旧川崎製鉄、イタリアとブラ



カンブリビーチからプライア・モーレ港を望む。

ジルの合弁製鉄所であった。)、バーレ・ドリオ・ドッセ公社と製鉄製品積出港・プライア・モーレ港が在ります。

元来このあたり一帯は、ヴィトリア街全体と同じく小高い岩山とマングローブの湿地帯で構成されていて平地が少なかったため、1800年半ばから湿地帯や海の遠浅部を盛んに干拓、造成して商業地や住宅地を確保して現在のヴィトリア島が形成されたそうで、このカンブリ海岸周辺も同様です。

私がヴィトリアに新婚旅行で来た1977年頃はこの海岸の道路は単線で狭く、宿泊したホテルの数メートル前には波が寄せていました。そして、家族で引っ越して来た1982年には護岸の為に砂浜を広くするた

めに沖合よりポンプで砂を吸引して積み上げ現在の砂浜を造成して立派な海岸が出来ました。津波や台風による高潮の心配がありませんが、潮流の影響で砂浜が削られていく現象が起こり、ビーチの砂浜に垂直な形状で3ヶ所の堤防を築き上げるとその現象は無くなり、現在の風光明媚な市民の憩いのビーチが出来上がりました。

「カンブリ海岸のアサリ貝のエピソード」

私達が引っ越して来た当初はこのカンブリ海岸の砂浜にはあさりやハマグリ貝類が沢山いて、週末には多くの日本人達が貝類を獲っていました。ツバロン製鉄所建設の為に日本から多くの駐在員家族が住んでいました。話によると、スコップで大量の貝類を獲って楽しんでたと聞いています。私達も膝くらいの水深の砂を両足でツイストダンスみたいな足の動きで貝を獲っていました。大きいものは握り拳くらいの大きな貝が獲れた事を思い出します。凄く獲れました。

しかし、その貝には苦い経験があります。喜んで獲って来た貝を食べるために砂を吐かせようと浜から汲んで来た塩水に一日浸けて味噌汁に入れて食べようと企てました。ところが、口に入れたとたん、ジャリ、ジャリと砂を噛む食感があり吐き出しました。どうしてだろう？貝が砂を完全に吐いていない！よし！もう一度獲ってきて海から汲んで来た塩水に二日間浸けて味噌汁で食べましたが今回も同じでジャリ、ジャリと歯に感じました。しかし、同じ食卓で食べていた義母は「砂なんか全然感じない！」と言って美味しそうにパクパクと食べていました。この時に歯科医として初めて気付



ツバロン半島から弓状のカンブリビーチを望む。



プライア・カント区から弓状のカンブリビーチを望む。

かされました。「自然歯には神経が有って髪毛1本でも噛んでいる事を感じるが、総入れ歯は自然歯みたいに神経が無く歯茎で支えられているので少々異物でも食感がないのだろう。」

そんなに沢山いた貝類も現在のカンブリ海岸には見られなくなっていました。多分、自然が無くなり、観光としてのビーチにってしまったからでしょうか？それとも、公害でしょうか？

カンブリビーチと私の関わり

風光明媚という言葉が適切かどうか分からないが、ヴィトリアとその近辺には美しいビーチが数ヶ所ありますが、こんな素晴らしい自然環境に20年以上住みながらその素晴らしさを自分の移住生活に取り得ていなかったことに気付くことが出来ました。

ある金曜日の夕方、診療が終わり（土曜と日曜日の週末は休診）、なんとなくブラブラと気分転換のためにカンブリビーチを散歩して帰ることにしました。帰路の途中の公園は仕事帰りの若者、家族連れの人達、学生らしいカップル達が露店のテーブルを囲んで楽しく時を過ごす光景がありました。その公園を通り過ぎて、2～3分くらい歩くとカンブリビーチに着きます。両端をプライア・ド・カント区とツバロン半島に接する全長6kmを弓状に美しく広がるビーチです。このビーチは4年ほど前、約2年以上の日数をかけて、カンブリビーチのモデル化がされました。以前の自然さを失ってしまいましたが、歩道を広くし、サイクリングロードやスケートボード専用ロードも加えモデルチェンジして大変明るいビーチになりました。そこには、若いカッ

プル、年老いたカップル、子供連れの家族、友達とのジョギング、ウォーキング、サイクリング、スケートボードビーチを楽しむ者、ビーチサッカーやビーチバレーボールを観戦する者、そして、私みたいにただブラブラしてビーチを楽しむさまざまな姿がありました。



夕方のカンブリビーチ。



カンブリビーチの日曜日の歩天国。

日曜日と休日にはカンブリビーチに沿って走っている両面6車線の道路は片面3車線は通行禁止になり、歩天国になります。本当にブラジル人は生活を楽しむのが上手です。勿論、経済も向上して豊かになっている事もあるでしょうが、貧しくて困難な時にも人生を楽しむというブラジル人を学ばなくてはならないとその時私は気付きました。



マッタ・ダ・プライア地区。

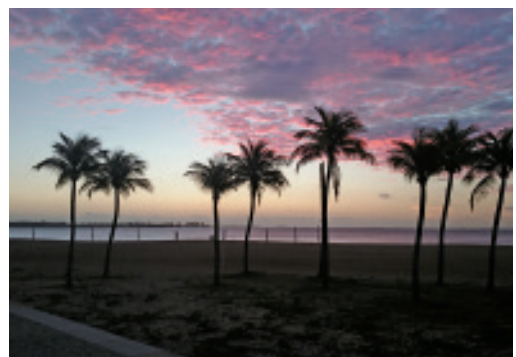
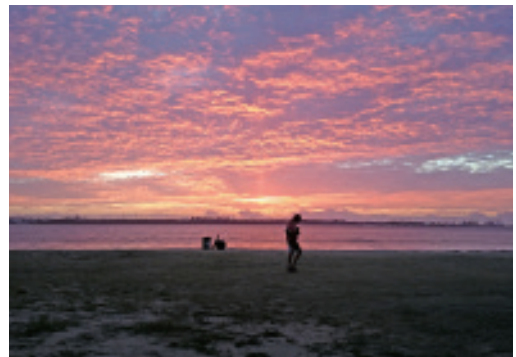
しかも、この地区は最近の調査 HID (HUMAN DEVELOPMENT INDEX 人間開発指数) ではブラジル国内7位内にランク付けされ、この指数は世界のノルウェーの指数と同じくらいだそうです。こんな素晴らしい自然環境が整った所に住みながら、その環境を自分の生活に取り入れてないことに気が付きました。

早朝の自転車と日の出の物語

還暦を7年も過ぎている現在、早朝5時には妻と一緒にカンブリビーチをサイクリングしています。この全長6kmの砂浜に沿ったサイクリングロードを東の空が薄赤くなりつつある風景を見ながらゆっくりと走るサイクリングは爽快な快い気持ちにしてくれます。このカンブリビーチは全長6kmの砂浜が三日月のように美しくゆっくりと弧を描いているビーチなので走っている位置、その日の天候状態や雲の形状によって、日の出の空のようすが違って見えます。ある日は雨を呼び起こす薄らい雲がかかった日の出の空もありますが、ほとんどの日々がピンク色の希望と期待の一日を呼び起こす日の出の風景が楽しめます。このカンブリビーチの毎日の日の出の風景を

楽しみながら、しかも、弓状に曲がった砂浜ですから、空と海に描かれるいろいろな景色とこのビーチサイドで繰り広げられるドラマを見ながら、そして、弓状のビーチの砂浜を見ながら、堤防に取り付けられているデッキでラジオ体操、ストレッチ運動をし、それらの風景をカメラに収めながら妻と一緒にヘルスサイクリングするのが今は日課に成っています。

冬の家を出る時は未だ夜明けしない暗闇ですが、カンブリビーチに着く頃はツバロン港の上空から青空に染まっていくブルーアワーとして、カメラに収める絶好のチャンスです。ビーチのウォーキング通りには既に人々の姿があり、「ボンジアー！（おはようー！）」と声をかけながら、「アテーアマニャーン！（又、あしたまで！）」と帰り道には、お互いの健康と幸せを確認し



プライアモーレ港上空から朝焼けのカンブリビーチ。

ながら、まさか故郷の福岡から真反対のブラジルのヴィトリアで人生を送るなんて少年頃は夢にも思いませんでした。

朋友との誓い

180ドルの所持金をポケットに入れて、若干20歳で単身農業移住して来た青年はこのヴィトリアでブラジル移住人生の基盤を作り、その3人の息子達もそれぞれの道を歩み、大学卒業後日本、英国、リオ・デ・ジャネイロ、サンパウロ等で留学や研修を終え、整形外科医、歯科医、消化器外科医として、彼らの故郷・ヴィトリアに戻って来て、ファミリーを築き上げています。しかし、同じ夢見てブラジル移住して来た

海外移住研修生の同期の熊沢薫君は2011年3月11日の東日本大震災と同じ日にブラジル移住人生を満喫することなく3人の子供を残して、この世を去ってしまった。彼とはブラジルの兄弟としてお互いに頑張ってきただけに非常に残念で寂しくも思います。彼が他界する数年前に「俺達はまだ還暦を過ぎてしまった。これからブラジルに移住して来て良かったと思える様なファイナル移住人生を送ろうや！」とお互い誓ったばかりでした。

あの世に去ってしまった朋友のためにも将来、100年、200年後の私達のルーツの過程を夢見ながら今日も妻と一緒に早朝のサイクリングに励んでいます。



ブラジル移住人生万歳！